

天声人語

感染症を退治しようと、人間が試みる。そうはさせじと、細菌が耐性を身につけていく。両者はのせめぎ合いは「軍拡競争」に例えられると、石弘之著『感染症の世界史』にあった。そして競争は細菌の側が有利だという▼理由は進化の速さにある。動物の場合、世代交代を重ねてゆっくり進化するのに対して、20分で1回分裂するような細菌は全く違う速度を持つ。新しい薬に耐性を持つ菌がいつたん現れれば、すぐに繁殖して、薬の効果を無にしてしまう▼そんな軍拡競争の怖さは、インフルエンザの新しい治療薬「ゾフルーザ」でも見られるようだ。供給量の4割を占めるようになつたこの薬、耐性ウイルスが出現しやすいうことが指摘されており、その感染力の強さも最近の研究で明らかになつた▼耐性ウイルスは子どもにも出やすいとされ、日本小児科学会は12歳未満には「積極的な投与は勧めない」としている。軍事力を振りかざすのをやめ、いたちごっこを避けようという判断もあるのだろう▼この冬はインフルエンザが早めに流行し始めたと聞く。発症後に薬で撃退するのが軍事力ならば、手洗いなどで未然に防ぐのは「外交力」に当たる。予防のためだろうか、電車などでマスク姿が目立つようになつた▼「マスギャザリング」という医療関連の用語を最近見かける。スポーツ観戦や初詣など、大人数が集中する場で感染の危険が高まることを指す。何かと集まることが多い季節である。